

『小さな猿塚』

金谷俊夫

その日、妻沼地方は朝から激しい嵐に見まわれ、町の守護神聖天様の境内の森は、大きく揺れ動き、ごうごうと唸りをあげていました。大きく張り出した大木の枝は、今にも折れんばかりでした。

それは今からおよそ四十年余り前の、昭和四十一年の夏の終わり、九月十三日。関東地方を直撃した台風四号の嵐の中の出采事でした。その台風は、最大風速四二メートル・町内の建物破壊一四一戸・浸水家屋三三戸・田畑の浸水二二〇〇ヘクタールにも及ぶ大きなものでした。

聖天様は、その本殿壁面の彫刻にある雉と猿とが守護動物なのです。そういう事から、境内の籠堂の裏手にある、児童遊園地には小動物の飼育小屋が造られていました。そこには、小鳥や猿が飼われていて、参詣に来る子供達を楽しませていました。なかでも、猿の親子は一番人気がありました。人なつこい猿達は、小屋の中を跳びまわり、愛嬌を振りまいていました。特に、「キー子」と名付けられた赤毛の子猿は、くりくり

とした大きな目が愛らしく、少しおしゃまな所がみんなの人気者でした。

ところが、今日の嵐は、この動物たちにも情け容赦なく襲いかかりました。小屋を吹き抜けて走る横殴りの風雨は、とても冷たく、この小さな動物たちの寝床をびしょびしょに濡らししました。動物たちもずぶぬれになって、小屋の隅で小さくうずくまっていました。お猿の親子も、今日ばかりは三匹で寄り添い、嵐の過ぎ去るのをじっと待っていました。ところが、台風は静まるどころか、夕方には更にその猛威をふるいはじめ、雨も風も益々すさまじく、あたりを揺すぶる轟きは、まるで天地が荒れ狂ったようでした。

その時です。突然、猿たちの小屋のそばにある大木の枝が、みりみりと大きな音をたてながら、猿たちを目標けて倒れてきたのです。「あつ、危ない」小屋の中では、お父さん猿とお母さん猿とがキー子をかばうように抱き合っていました。三匹ともあまりの怖さに、震えていました。「キー子、大丈夫か」、お父さん猿もお母さん猿も、必死にキー子を守ろうとしました。倒れかかった大枝は、風が吹く度に小屋を押し潰そうとしています。

「キー子、お母さんにしっかりとつかまっているんですよ。」キー子は言われるままに、お母さんにしがみつきました。恐ろしさのあまり、声を出すことすら出来ません。吹き飛ばされて来た枝や葉っぱは、水滴を撥ね飛ばして身体を刺し、がさがさ

小屋をゆすぶり、ごうごうと地の底から吠えあがるような轟きは、正に天と地がひっくり返るような有り様でした。

三匹の猿たちは、ただ恐ろしく、小さくなっておびえおののくばかりで、自然の成り行きになす術もありませんでした。「とにかく、この小屋から出よう。」と、お父さん猿が叫ぶように言いました。キー子をお母さん猿に預け、自分は小屋の金網に飛び移りました。そして、枝で破れた裂け目を押しあげようと必死でもがきながらこじあけました。

そして、少しだけ金網の裂け目が広がったとき、お父さん猿は、「キー子、この穴からお母さんと外に逃げなさい。」と大声で叫びました。

「キー子、お母さんにしっかりとつかまっているんだよ」「うん、わかった」

「あつ、危ない。木がキー子の方に倒れて来る。」「大丈夫だ。お父さんが押さえているから、その間にお母さんと一緒に逃げなさい。」

「お母さん、怖いよう。」
「しっかりとしなさい。このままだと小屋と一緒に潰されてしまう、早く逃げるんだ!!」お父さん猿の声は大きく必死の叫びでした。

お母さん猿は、すかさず叫びました。「お父さん、どっちに逃げたらいいの。」「とにかく早くここから出るんだ。」お父さん猿は振り向きざまに言いました。

その時、また大きな枝が、ばさつと小屋の上に倒れてきました。その瞬間、お母さん猿は、その枝手で払いのけながら、身をそらしました。子猿のキー子も身をくねらせて、倒れてくる枝を避け、小屋の外に飛び出しました。そして激しく揺れる大きな枝にしがみつき、一人難をのがれました。「キー子、どこにいるの。」お母さん猿は暗闇の中、夢中で我が子を探しました。

「お母さん、ここだよ。早く来て。」キー子も夢中でお母さん猿を呼びました。しかし、吹きすさぶ嵐に何もかもかき消され、暗闇のなかでは、どうすることもできません。突然、嵐の中に放り出されたキー子は、地面を這うようにしてお母さんの声に向かっていきました。しかし、なかなか前に進めません。

「キー子、どこに居るの。お母さんはここだよ。」お母さん猿も、声を限りに呼び続けました。でもその声もキー子には届きませんでした。

三匹の親子猿はばらばらになってしまったのです。父と母は、吹き荒れる聖天様の森の中を、呼び合いながらさまよい続けました。

しかしキー子を見つけることは出来ませんでした。お父さん猿は途方にくれ、お母さん猿は気も狂わんばかりでした。お母さん猿の足は、いつしか行つてはならない聖天裏の、深い芝川にかかる布橋を渡って、弁天裏と呼ばれる沼地の田圃の

方に進んでいました。

当時、聖天様の裏から中岡の瑞林寺までの間は、昔の沼を整地した低い田圃で、少しの雨でも冠水してしまい、人が通る事も出来ないような湿地帯だったので。お母さん猿の心配通り、キー子は一人ぼっちでさまよっているうちに、いつしかこの危険な弁天裏の森廻りと称する田圃のほうへ行ってしまったのです。暗闇の田圃は、水に覆われ、濁流は稲株を倒し、湖のようになっていました。キー子は生まれて初めて田圃に足をいれました。そこにはつかまる木も枝もありませんでした。キー子は稲株に捕まりながら、お母さん呼び続けました。

嵐は依然衰えることもなく、時と共に益々増水していきます。水嵩も徐々に増して、つかまる稲株も次第に冠水して、キー子は水と泥にまみれて身動きができなくなっていました。お母さん、助けて。」一人ぼっちの淋しさと恐ろしさが交錯して、気力も体力も限界でした。キー子の声は嵐の中に消えて行きました。「お母さん、お母さん」それでもキー子はお母さん呼び続けました。

しかし、返事は返ってきません。聖天様の森にはお父さんとお母さんがいるはずですが。キー子を探しているに違いありません。少し北に進めば、瑞林寺の高台があります。しかし、その僅かな距離の安全地帯は暗闇の中に埋もれて、幼いキー子の目に見えるはずありません。逆巻く濁流の中に迷い込んでしま

った小さな子猿は、首まで泥水につかり、今にも溺れそうです。

「お母さん、助けて。キー子はここだよ。」泣き叫ぶキー子の声は、空しく闇に消えて行くのでした。しかし、お母さん猿は届くはずのない我が子の悲痛な叫びが愛という心の耳に聞こえていたのです。お母さん猿は夢中になって、その声を追いました。嵐のなかを狂ったように探し続けました。

何時間たつたでしょうか。逆巻く濁流の中で稲株につかまって必死にもがいているキー子の身体に、とうとう触れることが出来たのです。「キー子、大丈夫。お母さんだよ。」お母さん猿は、しっかりとキー子の腕を掴んで、自分の胸に引き寄せました。

「お母さん」キー子も懸命に手を差し出しました。キー子の身体は長いこと水に浸かり、すっかり冷えきっていました。

「お母さん、寒いよう。」しっかりとしなさい、キー子。お母さんから離れないでね。今すぐ助けてあげるから。」お母さん猿は、しっかりと我が子を胸に抱きしめ、倒れた稲株に掴まりながら、何処か休める場所はないか、少しでも静かな所はないかと、探しまわりました。

「お母さん、寒いよう」キー子は弱々しい声をあげました。「もう少しだから、がんばって」お母さん猿は、キー子を励まし続けます。「お母さん、キー子、眠い。キー子は安心したのか、お母さん猿に、甘えるように訴えました。

「だめよ、眠ってはだめ。キー子起きるのよ。」お母さん猿は、懸命にキー子を起こそうとしながら安全な場所を手さぐりできがし廻っておりまして。

「キー子、キー子、目をさましてと、必死に呼びかけました。キー子の耳には、お母さんの声はるか遠くの方から聞えてくるような甘く安らかなやさしい声でした。キー子を抱えたお母さん猿は、安全な場所を探しつづけました。お母さん猿は、今にも倒れそうでしたが、それでもしっかりとキー子を抱えていました。

お母さん猿は、我が子の命を守ろうと必死でした。小さな身体はいつしかぐったりして、目もうつろになっていました。「お母さん、眠い・眠いよう・」キー子は今にも消え入りそうな声で、いいました。「キー子、しっかりと、目をさまして、



聖天様境内にある猿塚

お父さんもすぐに来るからね」お母さん猿は必死に呼び掛けました。しかし、とうとうキー子の身体は、つめたくなっていました。あ

の可愛い大きな目も閉じられたまま、もう目覚める気配もありませんでした。

お母さん猿は狂ったように、叫び続けましたが、やがてその声もかすれ、次第に力を失い吹きすさぶ嵐の音にかき消されてしまいうです。冷たい雨は、いまだに降り続き、風も絶えることを知りません。二つの小さな命を、玩ぶかのように、闇のなかで嵐は続きました。

疲れはて、力つきても、我が子を守るうとする思いだけが、お母さん猿を支えていました。「聖天様、どうかこの子だけは助けてください。」お母さん猿は、懸命に祈りました。しかし、その願いが叶えられることはありませんでした。

翌日、嵐の後の天気は上々でした。聖天様の境内に散乱した枝や、落ち葉、壊れた軒などを、院主様を中心に、近所の人が大勢でかたづけ始めました。怪我をした動物たちの手当てをしたり、壊れた小屋を修繕しました。

そして、逃げていた動物たちも、元気に戻りました。キー子のお父さん猿も、聖天堂の水屋の棟下で、うずくまっていたのを見つけ出されました。

しかし、お母さん猿とキー子の姿はありません。日は西の空に沈みかけました。それでも、みんなキー子たちを探しました。手分けをして、町の中も探しましたが、二匹の猿の姿を見つけることは出来ませんでした。

近所の人達は、「どこか遠くへ逃げてしまったのだろうか。

それとも聖天様の神隠しにでもあったのだろうか。「そのうち、ひょっこり帰って来るかも知れないよ」と、言い合っていました。その日は、一縷の望みをたくして、捜索を打ち切りました。

お父さん猿は、小屋の中を落ち着きなく歩きまわったり、うつろな目で遠くを見たりしていました。時々、悲しそうななき声をあげるのが、見ていてとても可愛そうでした。しかし、次の日も、その次の日も、お母さん猿とキー子を見つけることは出来ませんでした。

そして、またたく間に一カ月が過ぎました。弁天裏田圃の稲も、黄金色に色ずいて、重い稲穂は、頭を垂れて、さざ波を見るように、秋を迎えました。ある晴れた日、裏の田圃のおぼさんが、きれいに稔った稲を、手慣れた手付きで、刈り始めました。四角い田圃の粗方を刈りとり、向こう岸の畝が見えるところまで行くと、何やら不審なものに気づきました。

よく見ると、小さな子猿と親猿でした。二匹は抱き合ったまま、田圃の土に埋もれていました。おぼさんは、驚きの声をあげて、みんなを呼びました。

それは、あの時の聖天様のお猿の無惨な姿でした。骨はむきだしになり、それでもお母さんの猿の両腕はしっかりと我が子を抱きしめていました。その姿は、まるで眠っているよかのようによさしく見えました。

私達は、この猿の親子の生きざまに深く感動しました。親と

子の愛と絆、そして真の強さを教えられたのです。町の人々は、この猿の親子のことを、後々まで残そうと考えました。

妻沼商工会の皆さんの手で、聖天様の境内に小さな親子の猿の石像を建てました。それから、わずか40年、小さな猿塚は草に覆われ、こけむしたまま、人々から忘れ去られようとしています。猿の親子の強く逞しい生きざまと、純粹で清らかな愛情は、私達人間にも優るほどです。今の世の人々に残したい、生きた愛の物語です。

おわり